

あるきだした小さな木

ボルクマン・さく
セリグ・え
はなわかんじ・やく



世界のカラーどうわ 14

あるきだした小さな木

ボルクマン 作・花輪莞爾 訳 N.D.C.953 偕成社 1977年 P.66 24cm

Volkman-Delabesse, Thelma

LE PETIT ARBRE

©1969年12月1刷 1977年12月17刷

訳者 花輪莞爾

発行者 今村 広

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5
電話 東京(03)260-3221(代表)

印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

◎ 著作権者 ティスネ社 と契約し、独占翻訳出版権をとったものです。◎ 落丁・乱丁本はおとりかえします

8397-404140-0904



だしたちい小さなき木

テルマ=ボルクマン作

シルビー=セリグ画

花輪莞爾訳







ふかい ふかい 森の なかに、

お日さまが きらきら ひかる、小さな はらっぱが ありました。

そこに ちびっこの木が 一本 はえていました。

せいの 高さは、

パパの木 ママの木の はんぶんぐらいしか ありません。

かおを あげてみると、パパの木 ママの木は、

空の なかで こずえを ゆらゆら ゆらしています。

「パパ、パパは お日さまに とどくほど せいが 高いの？」

と、ちびっこの木は たずねました。

ちびっこの木は とても しあわせでした。

パパと ママの すぐそばに はえているなんて、

とても いいですよ！

その上、^{うえ}ともだちも たくさん います。
みんな 森の ^{もり}動物の ^{どうぶつ}子どもたちです。
子リスは ^{こりす}まだ、木の ^きぼりが へた。
ひな鳥は、^{ひなり}まだ よく とべません。
子どもちようちようだって、





そよ風^{かぜ}に ふわふわ のるのが やつとこさです。

みんな ちびっこの木^きが だいすき。

なぜって、ちびっこの木^きなら、えだから おちたって、

ちつとも いたくないでしょう。

ちびっこの木^きが いちばん すきなのは、小鳥^{ことり}たちでした。

小鳥は、いつも ずっと とおくまで とんでいけるんだもの。

小鳥は、いつも めずらしい はなしを きかせてくれるんです。

もちろん ひな鳥たちには、知らないことが いっぱい あります。

だから よるになっても ねむりもしないで、パパ鳥 ママ鳥たちの
おしゃべりを、こっそり きいてることだって あるんです。

ちびっこの木も、パパ鳥 ママ鳥から、

ふしぎな はなしを たくさん ききました。

はなしの なかに たくさん でてくるのは、

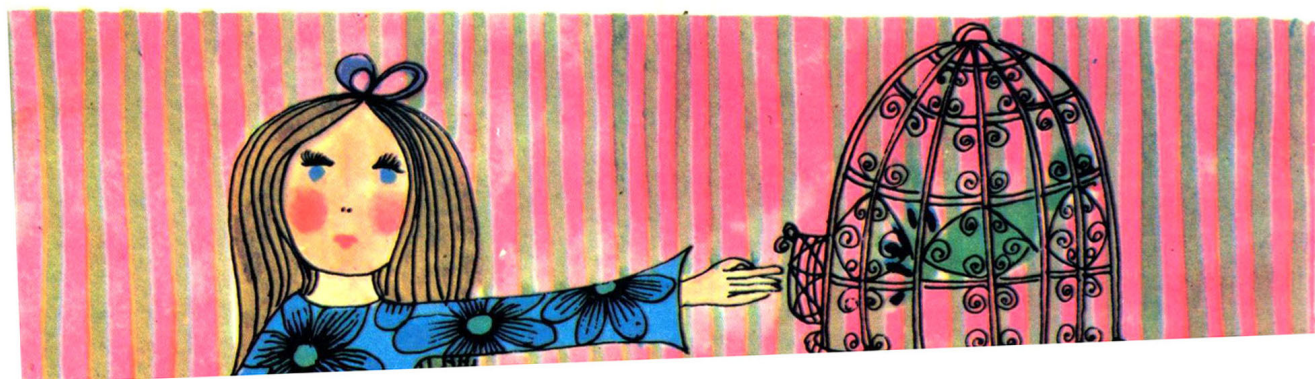
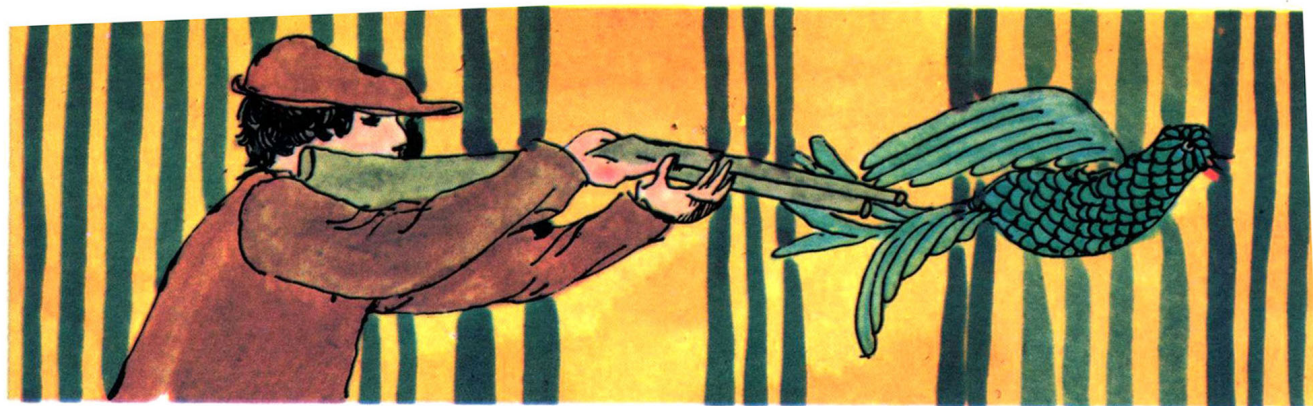
にんげんとか、男の子、女の子という ことばでした。

ひな鳥たちも、よく 言ってました。

「にんげんって、てっぼうを うつんだよ。」

「男の子って、パチンコで 鳥を うとうとするんだって。」

「女の子って、かごの なかに 鳥を おしこめてしまうんだって。」



にんげん、男おとこの子、女おんなの子……

そんなもの　ちびっこの木は、

いちども　見みたことないのです。

森もりは　とつても　ふかいのですもの。

「でも、にんげん、男おとこの子、女おんなの子って、どんなものなの？」

と、ちびっこの木は　たずねました。

「そうだね、へんなものさ。

はっぱも　なければ、はねも　ないみたいなんだ。」

と、小鳥ことりたちは　こたえました。

ある　はれた日ひの　夕ゆうがた、

へんなものが　ひとつ、はらっぱを　とおりぬけて　いきました。

へんなものには、はっぱも　はねも、毛けも　はえてないのです。

おっと しつれい！

あたまの てっぺんに 毛^けが ほんの ちよっぴり ありました。
ちびっこの木^きが、

この あたらしい おきやくさまを ながめていると、

パパ鳥^{とり} ママ鳥^{とり}は 大^{おお}あわてで、ひな鳥^{とり}に むかって さけびました。

「さあ にんげんだよ。ずっと とおくへ とんでいくんですよ！」

リスたちは 子^こリスを いえの なかに おしこみました。

いうことを きかない 子^こリスは、

しつぽを もって、いえの なかに ひきずりこまれました。

ちびっこの木^きの まわりには だれも いなくなりました。

ちびっこの木^きは、はじめてきた へんなものを、

すぐ ちかくで 見^みました。

それは 小^{ちい}さな 男^{おとこ}の子^こでした。

みちに まよった 男の子^{おとこ}なのに、うたを うたっていました。
「そんなに こわいものじゃ なさそうだぞ！」
と、ちびっこの木^きは おもいました。





男の子^{おとこ}の うたごえが きにいったからです。

うたごえは、小鳥^{こどり}たちの さえずりよりも、
ずっと きれいだと おもいました。

それに いちばん すきなのは、

男の子^{おとこ}の 目^めでした。

どんな 動物^{どうぶつ}にも こんな 目^めは ありません。

ちよっぴり はいいろで、

ちよっぴり 青^{あお}い いろです。

パパの木^き ママの木^きの あいだから

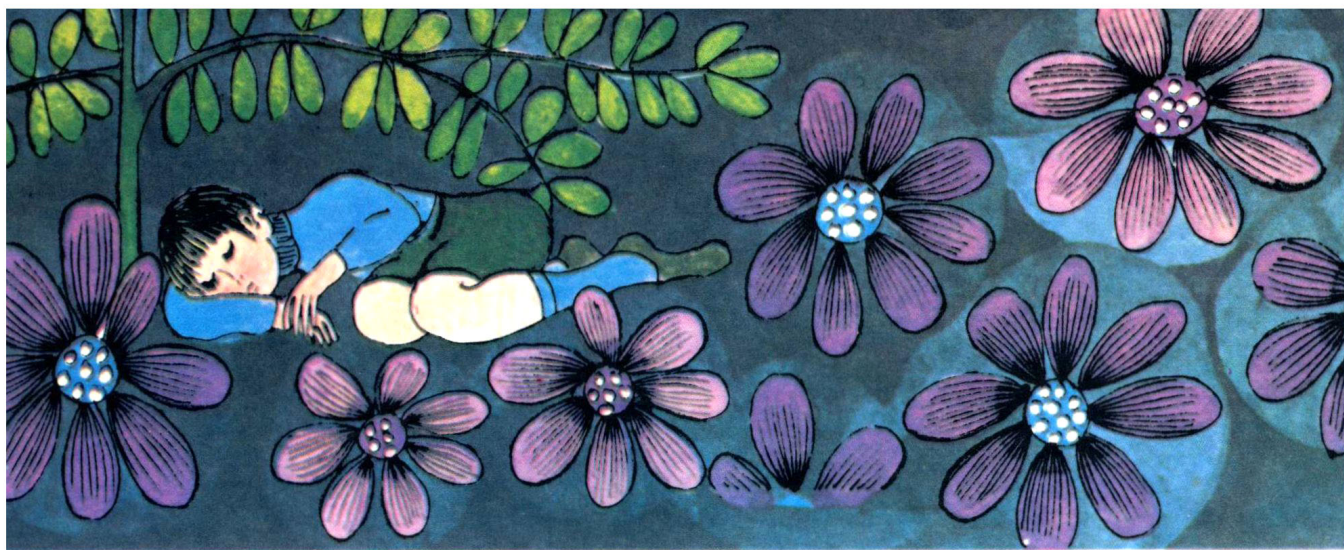
のぞいている 空^{そら}の いろと おなじでした。

男の子^{おとこ}は はらっぱを ひとまわりして、

のいちごを つんでいました。

それから どこかへ いってしまつて、

夕^ゆがたちかく また もどつてきました。



さつきより のろのろした 足^{あし}どりで。

さつきより かなしそうな かおつきで。

男^{おとこ}の子は、すこしのあいだ

ちびっこの木^きに よりかかっていたが、

やがて じめんに よこになって、

ねむりこんでしまいました。

よるに なると、

男^{おとこ}の子の いえでは 大^{おお}さわぎでした。

大^{おお}ごえで よんだり。

あかりを つけて さがしたり。

でも やっと 男^{おとこ}の子は みつかって、

よかった よかったと ささやきながら、

みんなは 男^{おとこ}の子を うでに だきしめて、

かえって いきました。



男おとこの子の いえの 人ひとたちを 見みてから、
ちびっこの木きは かんがえました。

『あの人ひとたちと いっしょなら、

ぼくは くらしていけるのになあ………

あの人ひとたちと いっしょに くらそう。』

それから いく日にちも、ちびっこの木きは

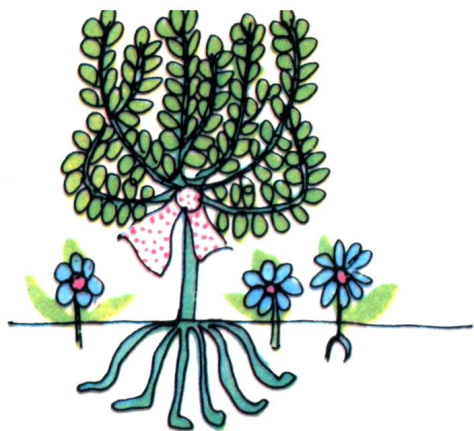
そのことばかり かんがえていました。

ちびっこの木きは そのことを

いちばん なかよしの すずめに

うちあけてみました。

でも、すずめは こたえました。



「だって、どうやるのさ？」

木^きってものは、ねっこで はえてるんだろ？
木^きは あるけないじゃないか。」

でも ほんとうに

木^きは あるけないかしら。

それは いままで、

ためしに あるこうとした 木^きが、

一本^{ぽん}も なかったからです。

ほんとうに いっしょうけんめいに

あるこうと おもった 木^きが、

一本^{ぽん}も なかったからです。